【現代語訳】　人の生まれつきの性質は悪であって，善といわれるものは人為的な矯正による後天的なものである。人間には，生まれつき利を好む性質がある。これに従っていくと，他人と争奪が起こり，譲り合うことがなくなってしまう。人間には，生まれつき，ねたんだり憎んだりする傾向がある。これに従っていくと，他人を傷つけ損なうようになり，信頼関係がなくなってしまう。人間には，生まれながらにして，耳目が美しい色や声にひきつけられる傾向がある。これに従っていくと，節度を越えて欲望にふけるようになり，礼儀や秩序が失われてしまう。つまりは，生まれながらの性質・感情のままにふるまうと，必ず争いや奪い合いが起こり，礼儀が犯され秩序が乱れ，ついには世の中が混乱に陥るのである。だから，師による教化や礼義による指導があって，はじめて他人と譲り合いができるようになり，秩序が守られ，世の中も治まるのである。以上のことからすれば，人間の本性は悪であるのは明らかである。善といわれるものは，人為的な矯正の結果なのである。

(注)「偽」は「作為」「人為」の意。

知行合一 ―王陽明

○だれそれは孝を知っている，悌を知っているなどという場合，必ずその人が実際に孝や悌を行っていてはじめて，「孝を知る人だ」[悌を知る人だ]ということができる。痛みを知るという場合も，自分が痛みを体験してはじめてそう言えるのである。寒さを知る，飢えを知るなどという場合も同様である。認識すること（知）と，実際に行い体験すること（行）とは，どうして別々にすることができようか。

(『伝習録』上 － 5)

○知は行を導く指標であり，行は知を実現する努力である。知は行の出発点であり，行は知の完成である。(同)

心即理

親に孝行するために，親のところへ行って孝の理を探究する必要はない。君主に仕えるのに，わざわざ君主のところへ行って忠の理を探し求める必要はない。友に交わったり，民を治めたりするために，友や民のところへ行って信や仁の理を探究する必要はない。すべては，自分の心の中にある。心がそのまま直ちに理なのである。

(『伝習録』上 － 3)

致良知

私が，物事を正し，知を実現する（格物致知）というのは，わが心の良知をあらゆる事物の上に実現することをいうのである。わが心の良知とは，いわゆる天理のことである。わが心の良知であるところの天の理を事物の上にもたらせば，あらゆる事物は本来の正しいあり方になるのである。わが心の良知を働かせるのが致知であり，事物が理にかなった正しいあり方を得るのが格物である。これは，心と理とを一つにする実践である。

(『伝習録』中 － 6)

(注)「良知」は，「人間にはわざわざ学ばなくても自然にできるようになる能力（良能）と，あれこれ考えなくても自然に分かってしまう能力（良知）がある」という孟子のことば（「尽心」上篇）に由来する。

3 道家の思想

▶ pp.72 ～ 73

無の効用 ―老子

道は何ごともしないけれども，しかしすべての物事は道のはたらきである（「道は常に為す無くして，しかも為さざるは無し」，『老子』第37章）というのは，老子の思想の基本にある考え方である。この，「無い」ということがあらゆる「有る」ものの根源であるということを，老子はたとえば次のように説明している。車輪の轂（こしき）は，輻（や）（車輪のスポーク）を受け止め，